

平和運動分科会
＜ベトナム反戦運動とその時代—地方ベ平連の展開＞

反戦・反核・反基地
—広島・岩国ベ平連の場合—

呉工業高等専門学校
木原滋哉

キーワード：広島ベ平連、岩国ベ平連、平和運動、対抗文化、米軍基地、反核運動、反基地運動

1. はじめに

1965年米国が北ベトナムに爆撃を開始して2ヵ月後、ベ平連は東京で誕生した。ベ平連の組織原理は、「ベトナムに平和を！」などに賛同すれば、誰でも「ベ平連」と名乗ることができるというものだった。この組織原理は、労働組合などの大組織に所属していなくても、個人としてベトナム反戦の意思を表明することでベ平連の一翼を担うことができるという画期的なものであった。これによって政党や団体への所属を通じて政治参加するのではなく、個人として直接ベトナム反戦を担うことができるという新しい政治空間が誕生したのである。そして各地にベ平連を名乗るグループが結成されて、さまざまなベトナム反戦運動の一翼を担った。ベ平連は、60年安保闘争時に誕生した「声なき声の会」から「市民運動」としての組織原理を継承・発展させただけでなく、活動スタイルのひとつとして「定例デモ」というスタイルも継承した。しかし、いわゆる地方ベ平連は、その地域が置かれている状況によって、多様な性格を持っていた。米軍基地などの米軍施設や領事館などアメリカ政府機関がある地方都市では、ベ平連を含めたベトナム反戦運動による抗議の標的が具体的に存在していた。そうした施設や機関が存在しない地方では、ベトナム反戦運動の活動スタイルは異なっていた。したがって、ベ平連が切り開いた個人原理にもとづく政治空間の誕生を評価するためには、多様な地方ベ平連の活動を検証する必要があると思われる。

本報告は、さまざまな地方ベ平連のひとつとして、広島と岩国におけるベ平連活動を取り上げて、地方ベ平連の活動実態の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 広島・岩国という政治空間

広島周辺には、広島市から50キロ以内いくつかの米軍施設が存在していた。広島県内には、広島市から約30キロの地点、現在の東広島市内には川上弾薬庫、呉市周辺にも秋月弾薬庫、広弾薬庫など複数の米軍施設が存在していた。また米軍岩国基地（米海兵隊岩国航空基地）は、広島県に隣接する山口県ではあるが、広島市から約40キロの距離に位置している。広島は、米軍基地などを抱える地域と共通する特徴を有することになる。

しかし米軍岩国基地の場合、他の在日米軍基地と若干異なるのは、アジア地域で最も強力な反戦運動が米兵によって組織化されていたという点にある。広島・岩国には、ベ平連などベトナム反戦運動が抗議する具体的な標的が存在していたということにとどまらない。岩国基地内における米軍兵士の存在は、抗議の対象というよりも、連帯の対象でもあった。広島・岩国におけるベ平連の活動は、米兵の強力な抵抗運動が存在したゆえに、米軍基地が存在していた他の地域におけるベトナム反戦運動と共通点をもちながらも、独自の展開を示した。

また広島は、被爆地として平和運動団体が多数存在するという政治空間である。しかも、米国が北ベトナムに爆撃を開始した同じ年、原水禁運動が分裂していた。原水禁運動の統一を求める市民の動きが模索されるという状況の中で、広島ベ平連が誕生した。広島ベ平連は、とりわけ平和運動の分裂という政治空間に少なからず影響を受ける。

3. 広島ベ平連の誕生

「ベトナムに平和を！」などに賛同すれば誰でも「ベ平連」を名乗ることができるので、各地で地方ベ平連が誕生したが、そのきっかけは地域によってさまざまである。たとえ一個人が声を上げた場合でも、その個人の友人や知り合いなどのネットワークが活用される場合が多い。広島ベ平連の場合は、「広島大学わだつみ会」をコアにして、1968年1月に結成された。広大わだつみ会は、1950年『きけわだつみのこえ』出版をきっかけとして反戦・平和団体として「日本戦没学生記念会」（略称「わだつみ会」）が設立されたときに、いくつかの大学に設立された「わだつみ会」のひとつであった。

広島では、1966年6月に、ベ平連の「全国横断反戦講演」旅行の一環として、ハワード・ジン、ラルフ・フェザーストーンを招いて集會が開かれ、11月には小田実などを講師として「みんなで平和を！ヒロシマからベトナムへ」集會も開かれていた。広大わだつみ会は、同じ66年11月に岡村昭彦を招いて「不戦のつどい」を開いている。また67年には広大わだつみ会は、岩国基地の米兵に英文の反戦ビラを配布する活動もおこなった。いくつかの活動を踏まえて、広大わだつみ会は、1968年1月にベトナム反戦運動を広島大学内にとどめず、広く市民に訴えるために広島ベ平連を結成した。「広島でのベ平連活動は、最初広大わだつみ会が、昨年の夏より会内の行事として細々と続けていましたが、本年1月、同会主催の映画会『イントレピッドの4人』を観賞した広大生に、ベ平連活動をやってみようと呼びかけたのが本格的な広島ベ平連の始まりとなったのです」（『ひろしまベ平連ニュース』第3号、1968年11月2日発行）。この時期に広島ベ平連を結成しようとしたきっかけになったのは、1967年10月の羽田闘争だったという。羽田闘争は、佐藤首相のベトナム訪問を阻止することを目的としていたが、日本がベトナム戦争に加担していることを本気で止めようとした点で、広大わだつみ会のメンバーにも衝撃を与えたという。

広島ベ平連は、広大わだつみ会などの広大生10数名を中心として結成された。メンバーとしては詩人として知られる栗原貞子、橋本栄一（高校教員、広島キリスト者平和の会）などの「大人」も重要な役割を果たしていたが、大学生を中心としており、連絡先も広大わだつみ会であった。広島ベ平連の活動は、写真展や定例デモの他に、広島県内にある米軍弾薬庫からの弾薬輸送反対の座り込みなどの活動、日本人でありながら米軍兵士としてベトナム戦争に従事していた清水徹雄を守る活動、分裂していた原水禁運動のあいだの対話を市民の手で進めようとした「平和のために市民の対話をすすめる会」での活動、岩国基地の反戦米兵の支援活動など、多岐にわたる。その中で、広島ベ平連の活動が、被爆地ヒロシマの思想に与えたインパクトについて取り上げたい。

4. 広島ベ平連における反戦と反核の論理

小田実は、ベ平連の活動を通じて、ベトナム戦争において米軍基地が存在することで日本が被害者でもあるが、同時にベトナムに対しては加害者の立場でもあることを強調した。広島においては、広島という原爆被害を受けた地域から米軍の弾薬が輸送されてベトナムの戦場で使用されることの意味が問われた。「加害者と被害者の関係」が広島においてとりわけ意識された。詩人である栗原貞子は、『ベ平連ニュース』にもたびたび文章を寄せており、広大内のサークル棟にあった広大わだつみ会にもしばしば顔を出し、定例デモでも多くの若者にこの問題を語りかけた。もっとも積極的な広島ベ平連にかかわった「大人」であった。栗原貞子は、「ヒロシマというとき」という一編の詩の中で、「<ヒロシマ>といえは <ああヒロシマ>と やさしいこたえが かえって来るためには わたしたちは わたしたちの汚れた手を きよめなければならない」と表現している。この詩は、広島ベ平連の活動を通じてヒロシマの意味を問い直した末にたどり着いた表現であろう。さらに、日本人米軍兵士としてベトナム戦争に従軍する中で米軍復帰を拒否した清水徹雄が幼いころ被爆した体験をもつ若者だったことは、広島に大きな衝撃を与えて、「清水徹雄君を守る広島市民の会」が結成された。原爆被害を受けた広島がベトナム戦争とどのようにかかわるのが問われたのである。「ベトナム戦争に加担しない」というベ平連の原則は、広島ベ平連の活動をとおして、広島の反核運動の一部に影響を与え、加害者意識を自覚する必要性を広めた。

広島ベ平連は、大学生を中心とした団体であったが、広島で長年にわたって平和活動を担ってきた「大人」も関与して設立された。その中の数名は、分裂していた原水禁運動のあいだの「対話」を模索する「平和のために市民の対話をすすめる会」にかかわっていた。広大ベ平連はこの「対話」に貢献できるほどの力量を持ち合わせていなかったが、「対話」を求める動きの一角を占めていた。また、絶対平和主義を掲げるクウェーカー教徒が設立した「ワールド・フレンドシップ・センター」とも密接な関係にあった。広島ベ平連は、組織化された平和運動に帰属していない人びとの受け皿になっただけでなく、原水禁運動の対立、クウェーカー教徒の活動といった広島の政治的空間の中で一定の役割を果たした。

広島ベ平連は、広大生を中心とし、事務局も広大の中にあった。そのため、69年大学闘争のなかで広大でも数カ月にわたって大学封鎖が行われて、大きな影響を受けた。広島ベ平連のメンバーも、大学闘争とは無関係ではありえず、広島ベ平連の活動が停滞し、定例デモも先細りになっていた。広島ベ平連ニュースも68年に第4号まで発行されたにとどまる。しかし、広島ベ平連は、70年以降、岩国ベ平連とともに、岩国基地の反戦兵士への連帯活動を担うことになる。

5. 岩国ベ平連の誕生

各地の地方ベ平連は、一つの活動スタイルとして定例デモを行っていた。誰でも参加できる定例デモという活動スタイルは、ベ平連への参加の敷居を低いものにしていて、同時にベ平連と関連して、脱走兵の支援活動が行われていたことの意味は小さくない。実際に脱走兵を支援して国外に脱出させたというのは、目に見える「成果」である。地方ベ平連において定例デモに参加していた人は、脱走兵の支援活動が成功したという「成果」を自分たちの「成果」として共有できた。ベ平連は、参加の敷居が低い入り口を用意するとともに、目に見える成果も提示できたという二重の活動スタイルを実践していた。団体に帰属していなくても参加できるということだけではなく、実際に成果を上げていたことも、ベ平連への参加が増えた理由の一つであろう。

しかし、脱走兵を国外に脱出させることが事実上困難になってくると、脱走兵への支援から軍隊内の反戦米兵への支援へとベ平連の活動方針の変化してくる。しかし、岩国基地をめぐる広島ベ平連や岩国ベ平連の活動は、ベ平連の活動が「脱走兵援助から米軍解体へ」と方針を転換したこととは直接の関係はない。岩国基地における反戦米兵への支援は、広島と岩国における地方ベ平連の独自の活動にもとづいてはじまったものである。

1968年、平和公園内でピラマキをしていた広島ベ平連のメンバーは、イギリスで反戦活動をした経験があり、平和公園で「武器よりも花を」といって手渡す運動を行っていたイギリス人クリス・カウリーと出会う（当時ワールド・フレンドシップ・センターのスタッフ）。岩国基地内の反戦米兵（アメリカ兵士組合A S U岩国支部のメンバーら）と接点をもったクリス・カウリー、岩国で反戦活動を始めていた岩国ベ平連、広島ベ平連が連携して、反戦米兵の支援活動を始めた。1970年1月岩国基地で反戦紙「SEMPER FI」が創刊されたが、これは三者の協力の成果であった。岩国基地の反戦米兵が書いた原稿をもとに、カウリーがタイプに打って仕上げ、広島ベ平連のメンバーが広島市内で印刷し、岩国に運び配布するという活動が始まった。3月には岩国基地前で米軍向けの「反戦放送」も開始された。

岩国ベ平連といっても、ほぼ一人によって担われているだけであり、それにクリス・カウリーが参加し、広島ベ平連がそれを支えていた。岩国におけるベ平連活動は、少人数で担われていたが、これらの活動が国際的な活動であるとして、岩国・広島ベ平連、クリス・カウリー、そしてPCS（Pacific Counseling Service）などによって、岩国・広島国際叛軍連合（ICMC）が結成された。こうした活動を基盤として、さまざまな活動が企画実施された。岩国基地周辺での「タコあげ大会」（1971年5月5日）、バーバラ・ディーン・コンサートのコンサート、ジェーン・フォンダらが参加したF T Aショーなどである。これらの活動は、岩国ベ平連が広島ベ平連をはじめとして各地のベ平連の支援を受けて実行した。

6. 岩国・広島ベ平連とアメリカ対抗文化

岩国ベ平連のメンバーが米兵との接点を拡大するために採用した活動スタイルの一つが「ラブ・イン」である。最初のラブ・インは、1970年4月花見の時期に錦帯橋川原でおこなわれ、その後岩国ではたびたび企画された。ラブ・インは、米国の対抗文化運動の中ではじまり、ベトナム反戦運動の中で利用されていたものである。岩国ベ平連のメンバーは、米兵との接点を拡大するために、米国の若者文化を取り入れたのである。岩国・広島ベ平連における叛軍活動の目標の一つは、米兵を排除するのではなく、米軍内部における反戦運動を高めることにあった。反戦米兵との連帯活動としての反戦・平和運動は、米軍基地の内部から基地機能を麻痺させることを狙ったものであり、米軍基地の撤去を求める反基地運動とは異なる特徴を持っていた。

72年に広島においてクウェーカー教徒が設立した「ワールド・フレンドシップ・センター」のスタッフであったクリス・カウリーと米国から来たクウェーカー教徒を講師として非暴力直接行動のワークショップが開かれた。その場で学ばれた非暴力直接行動は、広島や岩国でしばしば実践された。例えば、そのワークショップで学んだゲリラ・シアターという手法は、5月5日岩国基地を市民に開放するオープンデーのときに、反戦のアピールをするために実践された。市民的不服従あるいは非暴力直接行動は、ベ平連の活

動スタイルのひとつの特徴であると言われることが少なくないが、広島・岩国ベ平連のメンバーにとって、そのスタイルを具体的に学び実践する体験は印象的なものであったという。

反戦米兵との交流の中で、連帯活動の拠点としてコーヒーハウスを求める声が上がった。アメリカにおける反戦活動の手法としてコーヒーハウスを設けるとことはポピュラーな手段であったし、すでに日本でも三沢に「アウル」が開店していた。しかし、地元岩国ベ平連や広島ベ平連は、コーヒーハウスを仕切るほどの力はなかった。コーヒーハウス「ほびっと」は、福岡ベ平連と京都ベ平連が積極的に支援し担う形で、実現した。

7. 「ほびっと」での活動

1970年末「叛軍イワクニ」は、岩国・広島国際叛軍連合（ICMC）の名前で発行されはじめたが、1年後の71年11月には、「より多くの人々の参加、地域住民運動、日本人側の運動の充実を志向するにあたって、発行先の名称を岩国ベ平連として使用する」（「叛軍イワクニ」再生4号、1971年11月）ようになる。コーヒーハウス「ほびっと」が72年2月に開店したころ、岩国におけるベ平連の活動が、地元根付いたものである必要性が認識されていた。しかし、「ほびっと」は、岩国ベ平連の元々のメンバーは参加せず、広島ベ平連のメンバーも、経営には関わっていない。福岡ベ平連のメンバーと京都ベ平連のメンバーが住み込んで運営し、他の地域のベ平連メンバーによって担われたのである。だからこそ、米兵との連帯活動の拠点であるとともに、岩国市民との交流の拠点にもなるものとして、期待された。

ところが、開店からわずか4カ月後、72年6月4日「ほびっと」は警察の家宅捜査を受ける。また同月、岩国基地は「ほびっと」への米兵の立ち入り禁止を命令する。「ほびっと」と岩国市民との関係、「ほびっと」と反戦米兵との関係を断ち切ろうとする動きが明らかになったのである。この後、「ほびっと」への来客数が減少したが、76年に閉店するまでの間、読書会、学習会、講演会、コンサートなどを数多く開催して、ベトナム反戦運動と地域社会の接点としての役割を果たした。他方、米兵が立ち入りできなくなり、「ほびっと」が米兵と接触できる空間ではなくなったために、「ほびっと」内にあったPCS事務所は、別の場所に移転せざるをえなくなる。

「ほびっと」は、他方で、ベトナム反戦・米軍解体の運動の一環として、岩国基地の監視活動もおこなってきた。その手法は、直接の基地監視活動、米兵からの情報収集、米軍行動についての公開情報の収集であった。米兵からの情報収集は、直接に岩国ベ平連のメンバーが米兵に対して行うこともあれば、PCSスタッフからの間接情報もあったという。PCS事務所が「ほびっと」外に移転した後は、メンバーが直接PCS事務所と接触することで岩国基地の情報を入手したという。

8. 岩国・広島ベ平連の遺産

岩国基地に関する活動については、岩国基地の米兵がアジア地域でもっと強力にベトナム戦争に抵抗していたことを背景として、岩国・広島ベ平連の叛軍活動は、反戦米兵の活動に対する連帯、支援活動という特徴を持っていた。そのために、米兵自身がなじんでいた活動スタイルを採用していた。広島・岩国のベ平連は、結果として、米国の対抗文化運動の影響を強く受けることになった。コーヒーハウス「ほびっと」は、反戦米兵や岩国市民とのつながる拠点として構想されたが、米軍側の干渉によって米兵と接触する空間としての機能は大きく損なわれてしまった。しかし、76年1月に閉店するまで、ベトナム反戦運動と岩国市民を結び付ける拠点でありつづけたし、反戦米兵と接触する拠点としての役割を果たし続けた。

広島ベ平連のメンバーは、「ほびっと」への弾圧以後、「ほびっと裁判を考える市民の会」を結成して、裁判闘争を支える活動をおこなうとともに、74年「手づくり会館」を設立して、これまでの生活様式を見直す運動を始めた。廃船を活用して装飾したり、有機農法で栽培した野菜を使用した食事を提供したり、女性問題の連続学習会を開催したり、さまざまな活動を行った。社会運動が、反対・アンチを志向するのではなく、何かを作っていくことを重視した活動であった。これは、広島ベ平連が、非暴力直接行動を実践していった経験の延長線上の活動であると自覚されていた。また「手づくり会館」では、刑務所に収監されている韓国の政治犯に、世界中から誕生カードを送る活動など独創的な活動を展開した。

「手づくり会館」は、79年まで存続する。「手づくり会館」の活動は、広島ベ平連の活動が、ベトナム戦争に反対する活動から生み出した活動の独創的なスタイルであった。岩国で活動拠点として大きな役割を果たした「ほびっと」とともに、広島ベ平連がつくりだした活動として記憶されてよいだろう。